

MASUMI

No.43

真澄



「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介します。広報紙です。



其の後、乃歳舞家あり、本三河園、
嵐し、^{スエ}猿^{サル}ありて、^ゴ子^コと
二、^カ金^ナ砂^サ寺^テ近^チく、^シ住^ジり^リが、^ガ治^チ二^ニ年^{ネン}の、^ノ今^{イマ}の、^ノ往^ウ復^フの、^ノ歸^キり^リと、^ト...



花紋石
因^ユに、^ニ温^ン湯^{トウ}の、^ノ石^{イシ}を、^シ研^リひ^ヒて、^テ...

正^マ近^チが、^ノ田^タ村^{ムラ}神^{カミ}明^{アキ}言^{コト}、
正^マ近^チが、^ノ田^タ村^{ムラ}神^{カミ}明^{アキ}言^{コト}、
正^マ近^チが、^ノ田^タ村^{ムラ}神^{カミ}明^{アキ}言^{コト}、





第一章 かぐ

- ◆ 記す ◆ 詠む ◆ ことば
- ◆ 写す ◆ 綴る ◆ 編む ◆ まじはる
- ◆ 伝える ◆ 伝える

◆ 記す

真澄の記録は「紀行家・真澄」が、自身の旅の様子を記すところから始まりました。真澄はそれを「日記」と呼び、「〇月〇日、〇〇を出立し、〇〇をした」などのように書かれています。一般的な日記のような形式となっていますが、一頁（半丁）に記載する文章は十二行にするなど体裁を整えており、さらに内容を見ても個人的な日記というよりは、はじめから他者に見せることを意識して書かれた「紀行文」の様相を呈しています。

◆ 写す

真澄は機会に恵まれば様々な書物を写し、自身の学びのために「書写本」などを作成しました。そうすることによって原本から必要な箇所だけを抜き出して、自身の手元に留めておくことができました。また書き写すという作業には、自身の学びをより深めるという側面もあったのかもしれませんが、いずれ書写された内容からは、真澄の学び、関心のありようが垣間見えます。



《伊那の中路》 個人蔵・国重文

記念図書館など、多くの個人、団体のご理解とご協力を賜りました。そのおかげで、来館者に貴重な真澄自筆資料をじっくりと見て、その魅力を余すことなく感じ取っていただくことができました。以下に展示内容の一部を紹介します。

※本紙の表紙は、企画展の広報用ポスターを元に再構成したものです。使用画像は、上《みかべのよろい》、中《雪の秋田根》、下《雪の道奥雪の出羽路》（いずれも個人蔵・国重文）、背景《久保田の落穂》（館蔵）です。また題字「真澄」は、真澄自筆色紙（館蔵）の文字を加工したものです。

令和七年九月二十七日から十一月十六日の期間、当館二階企画展示室において、企画展「かく、えがく。―菅江真澄遺墨資料展―」を開催しました。本展では真澄の記録を、手法や内容に準じて分類整理し、それぞれ項目立てで紹介しました。真澄が文字で書いたもの、図絵で描いたものを一つ一つ紐解き、その輪郭を辿っていく過程で、真澄の考え方や価値観といった、「菅江真澄の核心」に迫る展示を目指しました。

本展の開催にあたり、国重要文化財「菅江真澄遊覧記」の所蔵者様をはじめ、県指定文化財「菅江真澄著作」を所蔵する大館市教育委員会並びに大館市立栗盛

▼古歌を写す

真澄の手によって書かれた色紙6枚の遺墨資料があります。そこに書かれているのは、いずれも真澄自身の詠歌ではなく、古歌です。自身の詠歌でないことを示すには、表に署名を書かないのが決まりで、それに倣って、本資料も裏面に【真澄】の署名があります。万葉集や新古今和歌集などに載せられた古歌を真澄が書き写したのは、純粹に自身の学びとするため、あるいは色紙などに和歌を認める際の【散らし書き】の構成を試す目的であったかと考えられます。



「真澄色紙断簡6点」個人蔵

第二章 えがく

- ◆山河 ◆沼・潟・湖 ◆海 ◆清水
- ◆滝 ◆動物 ◆植物・藻類・菌類
- ◆石・岩 ◆奇貨 ◆神仏 ◆板碑
- ◆人形神 ◆人々の暮らし

◆植物・藻類・菌類

真澄は故郷・三河にいたときに、隣藩である尾張にて本草学を学び、薬師としての技能を身に付けたと考えられています。本草学とは、薬草などの植物を中心に、動物や鉱物といった自然物の薬効を調べる学問のことです。本草学を学んだ影響もあってか、真澄は植物の図絵を比較的多く残しています。四季折々の樹木や草花の様子を愛でるように描くことはもちろん、学術的なアプローチを意図してか、対象物を拡大して描くこともありました。また植物に限らず、海藻やキノコなども描いています。

▼本草学を学んだ成果

アイヌが【ヌベ】と呼び、男鹿の人々が【エゾロ(エジヨロ)】と呼んだ植物が真澄は記録しています。シュロソウのことです。真澄は「男鹿では米に混ぜたり、餅にしたり、煮たりして食べる」と記録しています。また、「この植物には雌雄があり、それぞれの葉の巻き方や花の付き方が異なる」とし、観察に基づいた精緻な図絵を描いています。細かな観察は本草学を修めた真澄ならではのでしょう。



《男鹿の鈴風》個人蔵・国重文

▼森吉山で見つけたキノコ

真澄は森吉山(北秋田市)を登る途中でキノコを見つけ、図絵に描きました。「カツラの朽木にマスタケが生えている。魚の鱗の身の色に似ていることからそう呼び、山仕事をする者たちはこれを火口にする」と真澄は記しています。



《みかべのよろい》個人蔵・国重文

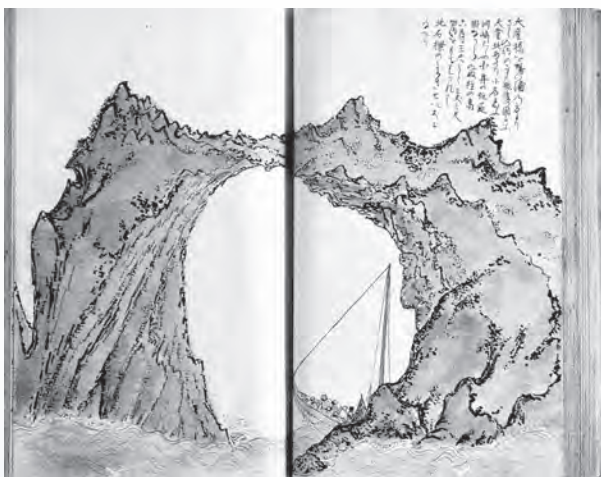
◆石・岩

真澄の関心は、石や岩にも向けられました。自然が作り上げた珍しい形の「奇岩」などは、頻繁に図絵に描きましたし、本草学的な見地から、鉱物への関心も非

常に高いものがありました。さらに、今日でいう民俗学的な見地から、「雨乞い」に用いられる石などについても大いに関心を寄せました。

▼荒波が削った岩の橋

丸木舟に乗って、男鹿半島西海岸の奇岩を見ながら進む真澄の目に飛び込んできたのは、橋が架かったような形をした大岩、大栈橋です。その語源については「山橋、あるいは石橋(シヤクキヤウ)が訛ったものか」と真澄は考察します。図絵には帆柱を立てた船が客を乗せ、大栈橋の下を通り抜ける様子が描かれています。大栈橋は、当時からすでに男鹿の観光名所だったのでしょう。



《男鹿の島風》個人蔵・国重文



●そもそも目潟とは…

【男鹿半島概略図】



秋田県の西側に位置し、日本海に突き出すような形をした男鹿半島。この半島に【目潟】と呼ばれる三つの淡水湖が存在します。三つの目潟は、火山活動であるマグマ水蒸気爆発によって火口（マール）が形成され、そこに地下水などが溜まってできた火口湖の一種です。それぞれ【一ノ目潟】【二ノ目潟】【三ノ目潟】と呼ばれています。江戸時代に男鹿半島を訪れた真澄の日記の中にも、これら三つの目潟が登場し、周辺の様子とともに記録されています。本展では真澄が記録した三つの目潟に焦点を当て、所蔵者の許可を得て、自筆本図絵をパネルに紹介しました。

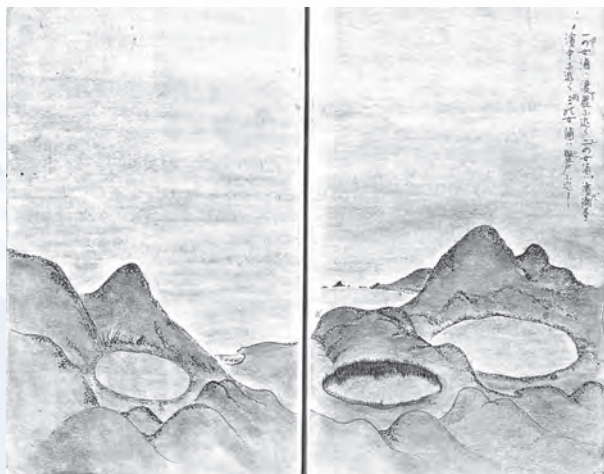
男鹿半島の三つの目潟は【男鹿目潟火山群】と総称されます。三つの目潟は半島の北西部にある丘陵地にまとまって位置し、ほぼ横一列に並んでいます。東から順に、一ノ目潟（男鹿市北浦西水口）、二ノ目潟（同戸賀塩谷）、三ノ目潟（同戸賀塩浜）となり、【目潟】の名称が示すように、概ね円形をしています。これらは、水とマグマが接触して起こるマグマ水蒸気爆発によってできた火山地形（マール）の典型として、また一度の火山活動でできた、単成火山群の

事例として、広く知られています。

そもそも国内においてはマール自体が珍しく、東北地方ではこの男鹿目潟火山群が唯一で、その他でも伊豆大島や鹿児島県に数例確認できるだけです。

「一ノ目潟は戸賀の近くにあり、二ノ目潟は浜塩谷、浜中の近くに、また三ノ目潟は塩戸の近くにある」

《男鹿の鈴風》図絵説明文より



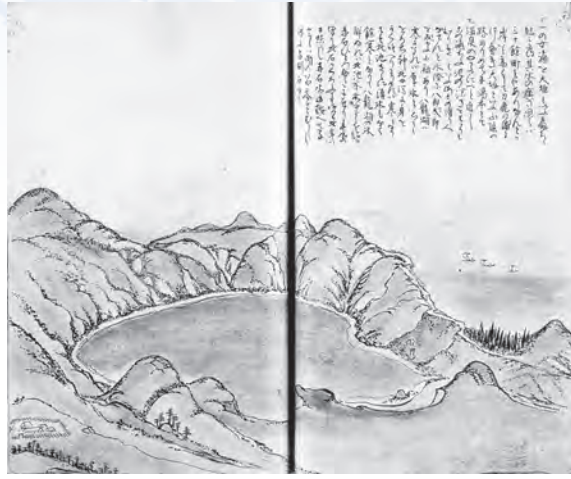
図絵右から順に、一、二、三ノ目潟
《男鹿の鈴風》個人蔵・国重文

●一ノ目潟

一ノ目潟は、直径約600m、水深約45mで、6〜8万年前に形成されたと考えられています。国の天然記念物に指定され、地球の地下深いところから噴き出した岩石【カンラン岩】が見られる火山として、また湖底堆積物の層が縞状に堆積する【年縞】が確認されている場所として、世界的にも注目されています。ただし男鹿市の水源になっているため、一般の立ち入りは禁止となっています。

「一ノ目潟を眺望する。水面がどこまでも広がっていて、その深さは測り知れないという。岸边に赤い石が一つある。また八郎太郎を祀る祠があった。この潟にはメナダ、セグロ（マルタウグイ）、バコ（ウキゴリ）といった魚がたいそう多いとのことだ」

《男鹿の春風》本文より



一ノ目潟 《男鹿の春風》個人蔵・国重文

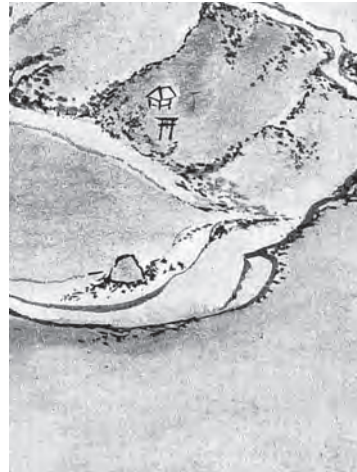
日記《男鹿の春風》の文中に【赤い石】が登場します。真澄が描いた図絵を拡大すると、確かに一ノ目潟の岸边に赤い石らしきものが見えます。真澄はこの赤い石について、次のように記録しています。

「赤い石が一つ、一ノ目潟の岸边にある。春になって水量が増すと、この石が水の

中にすっかり隠れてしまうことがある。そうだった年は日照りになるという。また反対にこの赤い石が水の中にかくれなかった年は、雨がたくさん降ると昔から伝えられている。【占い石】である」

《男鹿の春風》図絵説明文より

真澄が記録したこの【赤い石】と思われるものが当地に現存しています。



《男鹿の春風》個人蔵・国重文より部分拡大



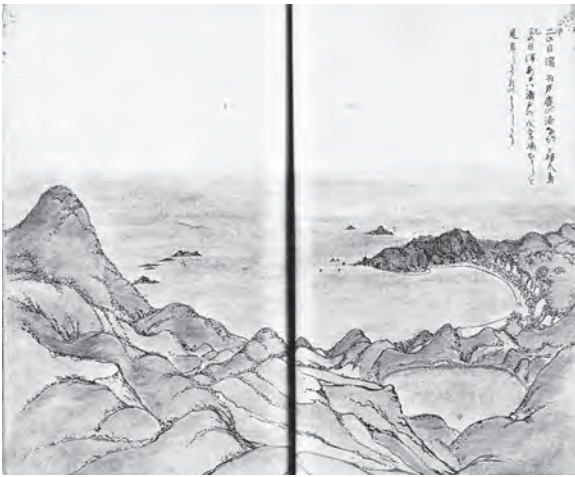
一ノ目潟の傍らにある赤い石
(令和5年9月撮影)

●二ノ目潟

二ノ目潟は、直径約400m、水深約12mで、一ノ目潟を形成した火山活動の末期頃に形成されたと考えられています。三つの目潟の中では一番水深が浅く、潟周辺には木々が鬱蒼と茂っています。

「さながら春のような心地がしてくるなか、山野をかき分けて進み、二ノ目潟を眺めた。戸賀の浦にある根太島や、塩戸のはなれ磯にある宮島などを見ながら、長い時間、芝生に腰をおろして休んでいた」

《男鹿の春風》本文より



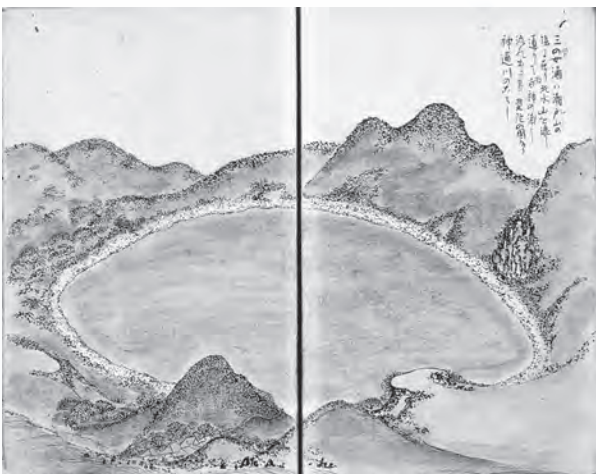
図絵右下が二ノ目潟。その上は戸賀湾
《男鹿の春風》個人蔵・国重文

●三ノ目潟

三ノ目潟は、直径約400m、水深約31mで、二ノ目潟が形成された後、2万4千年前に形成されたと考えられています。三ノ目潟は県の天然記念物に指定され、春になると周辺には、エゾエンゴサクやニリンソウなどの山野草が咲きます。

「三ノ目潟は塩戸集落近くの山陰にある。この潟の水は、山の隙間を通って、白神不動尊の辺りから海へと流れ出る。まるで飛驒の国にある神通川のようなだ」

《男鹿の鈴風》図絵説明文より



三ノ目潟 《男鹿の鈴風》個人蔵・国重文

文化六年（1809）七月～九月、真澄は現在の五城目町を拠点にして、近隣の集落を巡って様々な記録を残しました。また翌文化七年（1810）の一月には、八郎潟周辺を巡りながら、結氷した八郎潟の湖上で行われていた氷下漁に関する記録などを残しました。

本展ではその際の日記《ひなの遊び》と《氷魚の村君》を取り上げました。真澄は土地の人々の生活に寄り添い、当地に残された歴史、文化、習俗などをありのままに記録しています。展示では真澄の目を通して見た、当時の人々の暮らしぶりを紹介しました。

第96回企画コーナー展



真澄の歩いた道

《ひなの遊び》と《氷魚の村君》

令和7年11月1日 ▶ 12月21日

《ひなの遊び》

文化六年（1809）
7月1日～9月1日

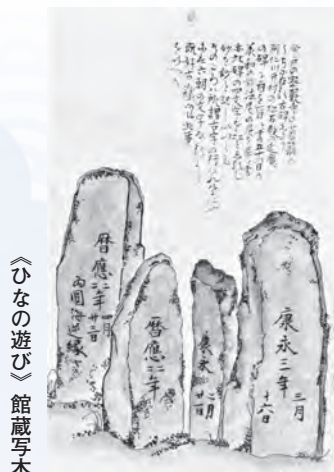
- 7月1日 ・和田（五城目町富津内下三内）の集落にある大宮権現を詣でる。 図絵①
- ・和田から屋鹿野（高崎広ヶ野）へ向かう。さらに高崎、上野の集落（上樋口樽沢・岩野山古墳群周辺）を経て、元いた里（※五城目町大川谷地中のこと）に着いた。
- 6日 ・眠流し行事をしている。桐の葉を流すのは珍しい。（※古くから七夕の日には梶の葉に和歌を書いて流す風習が知られている）
- 7日 ・五十目（五城目）の盆市が立つとあって、人々が群れ行く。夕方、人に誘われ、乱橋（潟上市昭和乱橋）に向かう。稲の葉には涼しげに露がついて、空には天の川がぼんやりと見えた。
- 10日 ・八郎潟近くの今戸（井川町）という村にきた。熊野山密厳寺実相院を訪れる。 図絵②③
- 日付不明 ・楞嚴山円通寺（五城目町富津内下山内）を訪れる。複製①、図絵④⑤
- ・同じく下山内にある宮地山三光院金剛寺を訪れる。
- 13～20日 ・このあたりでは13日の夕方から20日の夜にかけて盆踊りをするという。また「番楽」というものがある。複製②、図絵⑥⑦
- 日付不明 ・「能布巨島」（三種町天瀬川）について記す。 図絵⑧
- 9月1日 ・「御前柳神社」（八郎潟町小池）について記す。図絵⑨

【真澄ルート略図】





「康永三年の碑」令和二年二月撮影



《ひなの遊び》館蔵写本

今戸（井川町）にある熊野山密厳寺実相院は、熊野神社が隣接する神仏習合の仏刹でした。寺の後方から前方にかけて、石の卒塔婆（板碑）が八つあり、真澄はそのうちの四つを図絵に描いています。康永（1342～44）、暦応（1338～41）の紀年銘が刻まれており、いずれも南北朝時代の北朝の年号です。図絵右端の康永三年の碑と、左端の暦応四年（※二と書いて四と読む）の碑は、寺の前方に現存が確認できます。

▼密厳寺実相院の板碑……図絵③

▼当地で行われた盆踊り……図絵⑥

真澄は、当地で見た盆踊りについて次のように記しています。

「踊りの種類は【あねこもき】、【三勝】などいろいろある。たいそう古めかしいものだ。馬場の目（五城目町馬場目）などの山里の盆踊りは、特に風情があつておもしろい」

ただし、盆踊りの図絵を描いたのは真澄ではなく、久保田の町人で、画人・俳人であった五十嵐嵐児です。真澄は『ひなの遊び』の冒頭で「我が友である嵐児という人の画も一つ二つは載せて、まだ見ぬ人たちのために、古様の残る当地の習俗を知らしめたいと思う」と記しています。



《ひなの遊び》館蔵写本

▼番楽十二面……図絵⑦

真澄が図絵に描いたのは、番楽舞で使う十二の面です。修験であった金剛寺に残されていました。これら十二面は現存し、五城目町指定文化財となっております。現在でも当地には、山内城主であつ

た三浦氏の祝事に由来するという【山内番楽】（五城目町指定無形文化財）が伝わっています。

また真澄は番楽について「【番楽】というものがある。胆沢（岩手県）や桃生（宮城県）では【神楽】、糠部（主に青森県）では【能舞】、秋田では【あそび】とっている」と記しています。



《ひなの遊び》館蔵写本

《氷魚の村君》

文化七年（1810）
1月1日～25日

- 1月1日 ・去年から佐藤家（五城目町大川谷地中）でお世話になる。冬の間、雨は降らず雪だけが降り積もる。雪が晴れた日の朝は非常に気持ちが良い。
- 7日 ・七草粥などはなく、セリ、昆布、海苔、餅の入った雑煮を食べる。
- 11日 ・今日は米蔵を開いて祝う。お神酒がふるまわれ、女性たちが田唄をうたい、賑やかに過ごす。宴が終わると「山の神の幣」をわらで作る。 図絵⑩
- 12日 ・今日は「餅あいの塩」（※大正月と小正月の間を餅あいという）を買う習わしといって、人々が五城目の市へ群れをなしていく。男鹿の方から馬も人も八郎潟の氷の上を渡ってくる。 図絵⑪
- 15日 ・夕方になると、予祝行事の雪中田植えや果樹の年切りなどを行う。長い竿を立て、それに薦櫃（こもづち）を下げて茄子や瓜に見立てるのもその一つである。 図絵⑫
・夜になると、臼伏せをする。針仕事などめせず、物忌みをする。「馬の餅」といって、その家のわかぜ（※若衆）ら一人につき十二個ずつ餅を与え、厩にかけておく。 図絵⑬
- 18日 ・八竜湖（八郎潟）で行う氷下漁を見たいと思い、今戸（井川町）から湖上に入る。 図絵⑭⑮⑯
- 23日 ・再び八郎潟の氷下漁を見たいと思い、鯉川（三種町）まで移動し、そこから湖上に入る。 図絵⑰⑱
- 1月中 ・氷下漁の様子を図絵に描く。 図絵⑲⑳㉑㉒㉓㉔

【真澄ルート略図】



▼八郎潟の氷上を渡る……図絵⑪

「天王（潟上市）や、船越、脇本（いづれも男鹿市）などの村々より、男鹿の島人らが湖の氷の上を、今戸（井川町）まで渡って来る。五城目の市に出るためだ。氷上の道のりは、およそ四里（約16km）ほどという。馬に米を負わせて、陸地へ行くがごとく、唄いながら進んでくる」と真澄が記すように、冬季間、八郎潟は結氷し、その上を人馬が列を作って渡っていたことが分かります。



《氷魚の村君》館蔵写本

▼八郎潟の氷下引網漁……図絵⑱～⑳

「氷下引網漁は、まずは網を入れる【コミアナ】という大きな穴を掘るところから始まる。これを【凍切】という【手力】という柄の長い道具を使う。

次に【クリアナ】という小さな穴をいくつもあける。網の先端にはお椀（浮き）のついた細い綱が結ばれている。長竿や小鍵を使って【クリアナ】から細い綱を引き上げ、どんどん次の【クリア

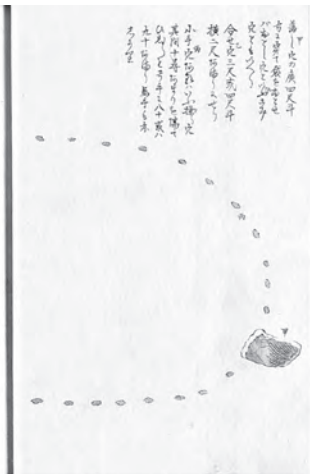
ナ】に縫い通していき、氷の下の網を引いていく。

上から見ると氷下引網漁の全体像は次のようになる。右から順に、網の入り口である【コミアナ】、【クリアナ】は左右にそれぞれ80〜90個ほどあけ、網の出口である【アワセアナ】から網を引き上げる。

氷下引網漁は七人で行う。網子と呼ばれる六人の漁師と、村君と呼ばれる長の一人である。最後は【アワセアナ】から網の引き上げを行う。網に結んだ綱を四人が腰に巻き付け、後ろに下がりがながら引き上げる。残りの二人は網が絡まないように小鍵などで調整する。この漁で捕れる魚は、フナ、ボラ、カレイ、ワカサギなどである」と真澄は記録しています。



《氷魚の村君》館蔵写本



編集後記

今年度の当センターの活動のハイライトは、企画展「かく、えがく。一菅江真澄遺墨資料展」の開催に尽きます。詳細は本紙2・3頁をご覧くださいと思いますが、まずは国重要文化財「菅江真澄遊覧記」を、およそ5年ぶりに展示することができました。多くの方が実際に目にするのを心待ちにされていたかと思います。中には期間中に何度も訪れたり、数時間滞在されたりと熱心な方々もいらっしゃいました。それから【初公開】となる資料が2点ありました。真澄自筆の短冊と色紙断簡の資料でしたが、それぞれ真澄の活動を様々な観点から考察することのできる、貴重な資料でした。

上記資料に限らず、多くの方のご理解とご協力のおかげで開催できた企画展でした。この場を借りて改めてお礼申し上げます。（角崎）

MASUMI
真澄 No.43

発行日◎令和8年(2026)3月19日
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足嶋崎字後山52
TEL.018-873-4121(代)